

都道府県別賞一等

保険は本当のお守りだった

広島県 福山市立城北中学校 二学年

新田 暁

普通に日常生活を送っていると、毎日毎日が驚くような事ばかりではない。そして、何でもない日常がどんなに大切かという事が身にしみて分かるのは、皮肉にも残念な事や悪い事やつらい事があってからだ。

僕の祖父は、大変優しい人だった。いつも僕達の事を心配し、優しい言葉をかけてくれ優しい笑顔でじつくり僕達の話聞いてくれる人だった。しかし、祖父は僕が生まれた時からずっと車椅子生活であった。祖父は、僕が生まれる九年前に交通事故にあつて、車椅子生活をよぎなくされていたのだ。それまでの祖父は、積極的に地域のボランティアにも貢献する優しい人だった。しかし、事故にあい、日常生活もがらりと変わってしまった。自分で歩く事が出来ず、車椅子での生活となり、トイレもご飯もお風呂も日常生活何もかも人の手を借りないと生活出来ないようになった。祖父本人が一番悔しい思いを長い間したそうだ。

僕は、病院の入院費や手術費とか高かっただろうなと思ひ、どうしたのか祖母に聞いた。すると、祖母は、

「保険が助けてくれたんよ。」

と教えてくれた。当初、祖父は大事故にあつていたので、あちこち体の手術に高額な医療費請求が来ると覚悟していたそうだ。しかし、祖母は、生命保険に入っていたので、色々保険でまかなえたそうだ。

「もし、保険に入っていなかったらと考えると、ぞつとする。」

と祖母が教えてくれた。日々、普通の毎日を送っていると、いつ起こるか分からない。起こらないかもしれない試練等にお金を支払うのは、非常にもったいないと思ってしまう。しかし、祖父のように本当に突然事故などにあつてしまつたら……。莫大な医療費などを支払えない。祖母は

「だから保険は、お守りなんよ。」
と教えてくれた。

「本当に大変な事は起こらない方が良いが、もし起こってしまったら、今までのような普通の生活が出来なくなる。『備えあれば憂いなし』と普段から準備をしておけば、いざという時に何も心配がない。」

ということだと祖母は教えてくれた。

僕は、家族みんながこれからも幸せな日常生活を送るためには、保険は大切

第61回中学生作文コンクール

なんだなと感じた。そして、もしもの為に保険に入っている家族にこれからも感謝していきたいと思った。僕も、自分が保険をかけられる年齢になったら、家族や自分自身の為に保険をかけて、幸せな未来を歩んでいきたいと思う。